

ラフカディオ・ハーンの講義録の中の花を扱った詩について — artificial / wild の視点に基づくハーンの自然観と美意識 —

石田芳子

はじめに

ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904 日本名、小泉八雲) は、日本の『怪談』民話を紹介して名を留めている作家である。一方で日本政府が日本人教育のために雇った外国人教師の中の一人でもあった。1896年から1903年まで東京帝国大学で実際に行った講義では、「草稿もつくり、わずかなメモだけを頼りに、口頭で授業を始めた。そしてその内容は、学生が書きとめるという形式をとった。ハーンは学生が充分書き取れるほどゆっくり、澄んだ美しい英語で講義したといわれている。また、ハーンの率直な講義は、魅力的で学生たちに好評を博した。」¹

この小論文においては、昭和女子大学の初代学長であった金子健二²教授の東京帝国大学時代のハーンの聴講ノートを基に、西欧のロマン主義における花の英詩の中から、ウォラー (Edmund Waller, 1608-1687)、オースティン (Alfred Austin, 1835-1923)、キーツ (John Keats, 1795-1821) のバラの詩を取りあげ、ハーンが花をどの様に受け止めているか、また西欧と東洋の自然をどの様に捉えるか、特に日本における西欧との違いを検討する。さらにハーンが生け花をどの様に捉えているかも検討をしたい。

1. 英詩における花の捉え方

ハーンは、西欧と東洋の花において、崇拜される花がどのように異なっているかを次のように述べている。

[The] flowers which are loved in the West and in the East are not the

same — nor are they admired or celebrated for exactly the same reasons, nor are they associated with the same class of aesthetic ideas. Moreover, it may be said, in a general way, that in the East the natural or wild flowers are commonly admired by poets rather than the artificial variety — notwithstanding some exceptions. In western countries, and especially in England, the flowers described by poets have been, for the most part, garden — flowers or artificial flowers. (講義録 128)

西洋と東洋では、好みの花が違ふし、觀賞され賛美される理由はかならずしも同じではないし、また、美的な判断の基準も同じものではないからである。さらに一般的に言うならば—例外はあるが—東洋では自然の、つまり野生の花が、人手を加えた種類のものより広く詩人によって愛されているといえよう。西欧の国々、特に英国では、詩人の描く花はほとんど庭に咲くもの—人手を加えた花である。(320頁)

西欧の自然の捉え方においては、人間が自然に働きかけ、世界は人間のために作られたものだと考え、自然や動植物は人間が征服すべきもの、人間に役立つものを作り出す素材だとして考えられてきた。その根拠は聖書である。聖書の「創世記」には、次のような記述がある。

「地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食べ物となるであろう」(「創世記」第九章第二—三節)

また、アリストテレス (Aristotle. 384-322B.C.) は、次のよう述べている。「植物は動物のために、動物は人間のために創造され、家畜は働くために、また野生動物は狩りの獲物として存在していたわけである。同様に自然は、もっぱら人間の利益に奉仕するために存在する」(キース 14-15)

このような考えを基に、人間は自然と呼ばれるものに対して敵対し、自然を畏れるがために人間の住みやすいように耕し開拓していった。そのひとつが西欧の庭園である。

Even though detailed documents concerning the design of English gardens in the Middle Ages do not exist, remaining evidence shows that English gardens in this period were more or less similar to those on the European continent. In every phase of social life, England was a part of the Continent. In politics, feudalism was dominantly pervasive. In economics, the manorial system prevailed. And Catholicism had a strong influence. In a word, England and the European countries shared homogeneous values. This influenced even garden design. Medieval gardens on the whole were utilitarian rather than decorative. In the courtyards of monasteries, herbs were grown for medicinal uses. In secular gardens, vegetables were grown. In either case, the garden space was walled around by materials of all kinds.

(Akagawa 12)

中世の英国式庭園のデザインについて詳細な記録は存在していないが、現在残っている限りの証拠によると、この時期における英国庭園は、多かれ少なかれヨーロッパ大陸の庭園と似ていることがわかる。社会生活のあらゆる局面において、英国はヨーロッパ大陸の一部であった。政治面においては封建制がどの場所でも優勢であった。経済面においては荘園制が広く行なわれていた。そして、カトリック教が強い影響力を有していた。一言でいえば、英国とヨーロッパ大陸は、均質的な価値を共有していた。このことが庭のデザインにも影響していた。全体としてみれば、中世の庭は、装飾的よりむしろ実用的であった。修道院の中庭でハーブが医薬として使用のために栽培されていた。世俗的な庭では、野菜が栽培されていた。どちらの場合においても、庭はあらゆる種類の材料を使って作られた塀によって囲まれていた。

「支配される自然」の姿は、宮殿の庭に典型的にみられるが、その典型的な庭園が打ち立てられる以前の考え方を例示した。西欧社会の自然観の特色は、自然と人間を区別し、人間を優位に立たせているところにある。一方、日本の自然観では、自然を一つの物として捉えてこなかった。自然と人間とははっきりした境がなく、自然は、人間の敵対する利用するべき対象物ではなく、人間と自然は一体であると考えていた。こういったことから、自然の中に神の息吹を感じ自然を神として崇拜する意識があった。狐野は次のように述べている。

このように農耕民族であった日本人は、五穀豊穡を願いあるいは感謝をし、神の前で神楽を舞うという儀礼に発展していったのであろう。そうしてそのような意識が、自然を友とするか、自然のままに生きるとかいう日本人の生活態度を形造り、具体的には、華道や茶道とか、あるいは和歌や俳句のような日本独特の芸術を生み出したと考える。

(狐野 27-28)

さらに、ハーンは、学生たちに対して「西欧と東洋（日本）の自然のとらえ方は同じでないし、美のとらえ方にも違いがある」と講義している。「美」の捉え方には様々な違いがあると思われる。例えば、満月が美しいばかりではなく、三日月もおなじように美しいし、また夜空の星もまた美しい。人の立ち振る舞いが見事なとき、それは美しいと感じられる。また、人が大変苦労して生きているのを目のあたりにしたとき、その人の生き方に感動する。これも美という行為の範疇であると思われる。詩を書くための営みや、茶をたてる、花を生ける行為も美しいと考える。このように、我々の周りや自然界の現象には、美という名のつく営みは多く存在する。さらに加えるならば、二人の人が同じ山を見ていても、あの山の稜線は美しいと同じ感動はしないであろう。それというのも、人は、それぞれに視点が違うし感じ方も違うと思われるからである。しかし、人間が感じる普遍的な美というものは、時、場所、物に限らず人間が共通に感動するものがある。それは、どこか根底に

貫いて流れる地下水のようなものが存在することは確かであると思われる。

例えば、ハーンのその講義において、人間が手を加えた花よりも自然の、野生の花の方が美しいと主張している。この考え方は、日本人の一般的な花の見方に共通するものと思われる。

One thing more, I hope that you will not think the interest in artificial flowers more really aesthetic than that in wild flowers. In these days we know through the science of botany that wild flowers are incomparably more interesting than cultivated flowers. The modern tendency to prefer the wild flowers as a poetical subject is a correct tendency. The cultivated flower, however beautiful it may seem, is really a kind of monster; and the proof is that cultivated flowers very quickly return to the state of wild flowers unless they are constantly cared for by the gardener. (講義録 128)

つけ加えておくが、私は諸君に人工的な花への興味の方が、野の花への興味よりはるかに審美的だなどと思ってほしくない。この場合われわれは、植物学のおかげで、栽培された花よりも野生の花の方が、比較にならないほど興味深いということを知っている。詩の題材として野生の花を好む傾向は、現代に広まっている。栽培された花がいかにも美しいものでも、実は一種の奇形なのだ。このことは栽培された花は庭師が絶えず手を入れていなければ、たちまち野生の状態に戻るという事実からも裏づけられる。(321頁)

他方、岡倉は、違う視点から植物に携わる人について、その人たちが花に持つ感情を次のように述べている。岡倉は、人工的な花の栽培とその人を弁護しているように思われる。

花を育てる人のためには大いに弁護してやってよい。植木鉢を扱う人は、花鋏を持った人よりはるかに人間的である。彼が水と日光について心を配り寄生虫と戦い霜を恐れ芽のでよう（ママ）がおそ

いときにやきもきし、葉が光沢を帯びるようになると有頂天になる。
(桶谷訳 82)

ハーンは、花について natural, artificial そして wild をどのように考えどのように分けているのだろうか。講義録から察すると、natural は、何も手を加えていないこと。また、natural と wild は同じ意味で用いていると思われる。しかし、artificial は、自然から摘み取り、手を加え、自然な姿ではない奇形の姿になったものを指していると思われる。例えば、摘み取ってきたものをそのまま花瓶に入れることも考えられるし、花や子葉をつかい buttonhole, corsage, circlet, head-dress などを創りだしたものなども考えられ、それを英国の夫人たちが装飾として衣服に付けたものなどもさすのであろう。さらに、庭園で栽培されたものも含まれるであろう。

ハーンが natural, wild と artificial を比較したことは、真の花の美しさとは、どのようなものであるかを表現するために使ったのであろう。自然、あるいは草花は、生き、死に、かつ蘇るもの、繰り返し姿を表すものである。毎年その季節になれば芽吹き、青々したものが地下から姿を現す。このことは、その青々したものの新鮮なものが美しいと感じ、命の営みが美しいと感じることを学生たちに示唆したのではないだろうか。それは、視覚から認識される表面的なものだけを視るのではなく、自然物あるいは目に留まるものの本物の美の見極め方を示唆していると思われる。

So universal is the Eastern and the Western custom of wearing flowers in the hair that I remember a case in which one learned foreign traveller could not be made to believe that flowers were not thus used by Japanese women. He had seen pictures, he said, of Japanese girls with beautiful flowers in their hair. On being told that these were artificial flowers, not natural ones, he appeared to think that his informers were stating something absurd; because if artificial flowers were used, why not flowers from the garden?

(講義録 129)

髪に花を飾る西洋の習慣が、ごく当たり前のものなので、日本の女性にはこのように花を髪に飾る習慣がないことが、どうしても信じられなかった、ある博識の外国人旅行者のことを思い出す。その人は、日本の乙女が髪に美しい花を挿している絵を見たことがあると言った。だが、それらが自然の花ではなく、造花であると聞かされ、彼は、それはおかし話ではないか、なぜなら、造花が使われるのならば庭の花を使ってもよいではないかと、思ったようであった。

(322-323 頁)

日本においては、花の靈力を感じ頭の鬢かんざしにした。例えば、『万葉集』「ももしきの大宮人は暇あれや 梅を挿頭かざして ここに集へる」

(第十卷 一八八三) とある。日本の髪飾りについて斎藤は、『日本の自然観の研究』(下巻 71 頁)において次のように記述している。「挿頭かざしという行為は、農業神降臨の微表、農耕呪術そして不老長寿のための行為という説がある。」

武田は髪飾りについて挿頭、挿頭花において、簪かんざしの起源として扱っている。いずれも飛鳥・平安時代から、髪に飾る風習は有ったということである。下記に日高他編の『人はなぜ花を愛でるのか』所収の武田の記述を引用する。

「冠位十二階³は、中国朝鮮の制度にならって七世紀の初頭つくられた個々の官人の身分を現わす、被りものかざしの制度であった。

命またの全またけむ人はたたみこも平群へぐりの山の熊櫛くまがしが葉を髻華うずに挿せその子

歌謡雪の島巖いわに植ゑたる石竹花なでしこは千世に咲かぬか君が挿頭かざしに

『万葉集』卷十九 一四 二三二

髻華うずとは、頭に挿す草木や花の飾りである。挿頭、挿頭花ともいう。簪の起源であるともいわれる。また纒かざらとって、蔓草を頭に巻き、そこに玉などをつけて、冠のようにすることもあった。植物を頭につけ、その生命力に感応して人の命が長く続くよう祈念したの

である。だから髻華や纏はまず、活きた植物でなければならなかった。
(武田 134-135)

大陸からもたらされた文化文物は、歌を詠むことにも影響した。『万葉集』の完成した八世紀には、すでに日本人は、花の歌を詠み花を愛でていたということが考えられる。また、髪飾りについて古い時代から引用する必要はないようにも思われるが、西欧との比較としてとりあげた。大陸からもたらされた挿頭は、飛鳥、平安時代の知識人の間で盛んに行われた。しかし、挿頭の習慣は、時代と共に変化してきたことは事実である。さらにハーンは、西欧の夫人たちが花を装飾として衣服に付ける習慣について述べているが、日本には、形は違うが西欧の夫人のように花を装飾とする同じ心理が、平安時代に花が衣類に登場する。

『源氏物語』や『枕草子』に見える「かさね」の色目としての桜・紅梅・山吹・女郎花など花の名を呼ぶ衣裳が出現した。ここで日本人は、「さくらの直衣のうし」とか「紅梅きぬの衣」と呼ばれるような花の色目による花の着物を着るようになった。こういう花を着る美意識は、やがて、辻が花とか友禅模様の花の衣装となり、着物の一部や全体に、桜の花、梅の花をはじめ萩・バラ・牡丹…など自然そのものを描き、染め、この花の着物を着るようになった。日本人だけが花を着る民族だといわれている。
(西山 26)

これは、西欧の夫人たちが花を装飾として衣服に付けた心理と、日本人が花を着物の上に描きそれを着るという行為と、同じ心情からでたものであると考える。このように時代を隔てて東西の花の表現は違う。さらに草花は、家屋の家紋の象徴とされている。しかし、西欧の紋章、とりわけイングランドにおいては、封建貴族のランカスター家とヨーク家とが、それぞれ紅ばら、白ばらを紋章として王位をめぐる私闘を繰り広げた⁴。このように様々な所で草花は、人間と関わっているということが理解できる。

第一章においては、西欧と東洋の自然の捉え方の違い、また美の捉え方の違い、野生の花と人工の花の違いを、ハーンは、講義を通して学生たちに提示したことがうかがえる。

2. バラの詩

Edmund Waller (1606-1687)

Go, lovely Rose!
Tell her that wastes her time and me,
That now she knows,
When I resemble her to thee,
How sweet and fair she seems to be.

Tell her that's young,
And shuns to have her graces spy'd,
That hadst thou sprung
In deserts where no men abide,
Thou must have uncommended died.

Small is the worth
Of beauty from the light retired:
Bid her come forth,
Suffer herself to be desired,
And not blush so to be admired.

Then die! that she
The common fate of all things rare
May read in thee —

How small a part of time they share
That are so wondrous sweet and fair.

さあ、彼女の所へ行きなさい。美しいバラよ。
自分自身の時間も、私の時間も無駄にしている人のところへ。
私が彼女をバラにたとえるときに
彼女がいかにか美しく愛らしく見えるかということを
彼女が知るように。

うら若い彼女に伝えてくれ。
自分の優雅さを盗み見されているのを
避けている彼女に。
もし、おまえがだれも住んでいない砂漠に咲き出たとしたら
だれにも愛でられることなく死んでしまうに違いないと。

そして、光を避けている美などは
さしたる価値もないのだ。
だから姿を現わすようにと
彼女に言うておくれ。
男から求められることを許し、
称賛されることに、顔を赤らめないようにと。

それから枯れておしまい。
すべてのたぐいまれな美の共通の運命の死を
彼女がお前のうちに読みとるように—
とても甘美で美しいものが、
なんと短い時間しか生きることは出来ないということ。

この詩は、少女の初々しい恥じらいとバラの象徴の初々しい美しさが重な

る。花に擬人法を使い感情のない花が人間の心をもつように思え、気持ちが生き生きとしていて説得力を感じられる。そして、切実な求愛の詩と思われる。愛しい人が自分の方を向いてくれない、そのため愛を獲得するために、さまざまな言葉を使用し表現している。また、無意識だった無垢の少女に少女自身の美を意識させる。さらに、比喻を使い花の命の短さと人間の生のはかなさを対比して表現している。第一連の一行目“Go, lovely Rose!”と呼びかけ、そして四行目の“When I resemble her to thee,”と表現しているところ、そして第二連の一行目と二行目の“Tell her that’s young, And shuns to have her graces spy’d,”は、いかにも人間に対して発話しているように感じられる。擬人法は、詩のなかで技法として使われるものである。

ハーンは、この詩について次のように述べている。

They appeal in the spirit of the old Roman poets — who told their sweethearts that life was short, and that it was waste of time to delay the happiness possible through union. That was also the fashion in the age of Elizabeth, but the sentiment as expressed by Waller is very delicately hinted and in this he resembles Shakespeare as a love-poet. (講義録 130)

この詩は、古代ローマ詩人たちが愛する女性に向って、命は短いから、結ばれれば味わえる幸せをひきのぼすことは時間の浪費だよと語った気分をかきたてる。それはまた、エリザベス朝の流行様式でもあったが、ウォラーの表現する感情にはきわめて微妙なほめかしがあり、この点で彼は恋愛詩人としてのシェイクスピア (William Shakespeare) に相通じている。(325 頁)

例えば、ミルワード (Peter Milward) は『シェイクスピアの人生観』のなかで『十二夜』の二幕四場に、同じような気持が表現されている場面の受け答えがあると述べている。

オーシーノ (Orsino) にこう語らせている。「女はバラのごときの

もの。その見事な花は、一度咲くやたちまち散ってしまうほかはない」。これを聞いたバイオラ（Viola）も、いやでもこういわざるを得ない。「確かにその通りです。なんて悲しいこと、花盛りを迎えたその時、もう死に果ててしまうとは」。女性自身は、それほど早く死んでしまうことはないにしても、その美しさはまず死に絶える。そしてその女性自身も、やがてはその後をおって死ぬ。こうして美の第一の敵は「時」であり、そして、時の流れに必ずやってくる「死」がその第二の敵である。（安西訳 174）

ものいわぬ花から発せられる想像とその空間は、花の存在と時間が一つの物であり、その一つの物が今の時点から未来の時点への移行と考えられる。その結果、朽ち果てる。ウォラーは、自分の愛する人に、バラの花を擬人化し言葉を駆使し、心理的に心の内を訴えていると考えられる。

ある日、友人である Wells からいくらかのバラの花が送られてきた。そのお礼に詩を送った。キーツ（John Keats）の詩を取り上げる。

As late I rambled in the happy fields,
What time the sky-lark shakes the tremulous dew
From this lush clover covert; when anew
Adventurous knights take up their dinted shields:
I saw the sweetest flower wild nature yields,
A fresh-blown musk-rose; 'twas the first that threw
Its sweets upon the summer: graceful it grew
As is the wand that queen Titania wields.
And, as I feasted on its fragrancy,
I thought the garden-rose it far excell'd:
But when, O Wells! thy roses came to me
My sense with their deliciousness was spell'd:
Soft voices had they, that with tender plea

Whisper'd of peace, and truth, and friendliness unquell'd.

楽しげな野原を つい先刻さまよった、
雲雀が巢を覆うクローバー葉から
震える露を払い落とし、勇敢な騎士が
押印のある楯を また持ち上げる頃だ。
ぼくは 荒野に咲く最も美しい花を、
咲きかけのバラを見た。それはこの夏
初めて香る花、女王ティタニアの持つ
魔法の杖のように ゆかしく咲いていた。
そしてぼくは その香りにひたり、
庭のバラに 遥かに勝ると思ったのだ、
だが、おおウェルズよ！君のくれた
バラの香りに ぼくの場合は虜にされた。
バラが柔らかな声をたて、安らぎと真実と
消えぬ友情を優しく訴え囁いたのだ。(331-332 頁)

キーツの詩は、野生の花の美しさと人工の花の美しさを比較し、どんなにか自然の花が美しいかということ、そして、その中に展開される詩の内容の美しさを表現している。この14行のソネットは、as、when、as、whenが交互に表現され詩の形をわかりやすく表わしていると考えられる。第一連の一行から四行は、一般的なことの表現である。雲雀と葉影すなわち青々と茂ったなかの雲雀の巢、大地と雲雀が舞い上がる天との関係。さらに我々は、多くの場合気づかぬうちに通り過ぎてしまうささやかな事柄の生の営み。騎士の傷ついた楯や剣の手入れは、栄誉とこれから起こりえる戦いを連想する。一連の一行、二行は、生と死の対比、さらには雲雀と騎士たちの美の行為。第二連では、早朝、楽しく散策している野辺で目にとまるのは、サマーフラワー (summer flower) やスイーツ (sweet) である。マスクローズ (musk-rose)⁵ が咲くのは夏の季節、今年始めて咲いた初々しい花、生命の誕生、それに

感激したのであろう。マスコローズは、晩夏に咲く野生のバラである。8行目にクイーン・ティタニア (Queen Titania) を登場させる。これは、シェイクスピアの『夏の夜の夢』のオーベロン (Oberon) の堤である。妖精の女王ティタニアが、夜のひとときを憩う場所に天蓋をつくっている。その花の色は、白色の野バラである。また、女王ティタニアを登場させることによって、読者を別の世界に誘い想像させ楽しくさせる効果がみられるのではないだろうか。春山の著書の中で『真夏の夜の夢』(ママ)におけるマスコローズ(麝香バラ)とオーベロンの堤についての文章を引用する。

「この森の中に野生の麝香草が咲いている堤がある。そこには九輪草も咲いておればスミレもはいちやいをしており、青々と茂った忍冬や、よい香りの麝香薔薇や野薔薇がその上を覆って、自然の天幕ができています。」(坪内逍遙訳)

これらの花の名前をはっきり記した自然描写の優れた見本であるといわれている。バラに関係した風俗が、台詞の中に織り込まれていることも、シェイクスピアの特徴である。(春山 46-48)

キーツは詩の中にシェイクスピアの影響を受け作品に表現している。その過程の様子が、ギッティングズ (Robert Gittings) の著書の中に述べられている。

More than all, he now followed one piece of advice Haydon had given him, with his usual whole-hearted literalness: 'read Shakespeare'.⁶ He had, of course, a working knowledge of Shakespeare from his earlier reading with Clarke, and from his visits to the theatre, when the text was illuminated for him by the lightning-flashes of Kean's⁷ acting. Yet until this moment, in the middle of March 1817, there is no sign of the appetite, the passion Shakespeare became for him, so that every poem and every casual letter echoed Shakespeare in its rhythms and conscious or unconscious

remembrances.

(Gittings 184-185)

とりわけキーツは、ヘイドン (Haydon, Benjamin Robert. 1786-1846) が、いつものとおりに、真心をこめて率直に「シェイクスピアを読みなさい」と言ってくれた忠告に従った。もちろん彼は、クラーク (Clarke) と以前一緒に彼の作品を読んだ経験から、そして、劇場にしばしば足を運び、キーンの演技の持っている稲妻のような煌めきによって、シェイクスピアのテキストがキーツにとって輝きを与えた時から、シェイクスピアのさしあたった実践的な知識は持っていた。しかし、1817年3月中頃のこの時期に至るまで、シェイクスピアが情熱の対象となった兆しはなかった。その結果として、キーツの作ったすべての詩、そして日常的な手紙は、そのリズム感、そして、何れの場合において、様々な思い出において、シェイクスピアの感じを反映していた。

「鋭い感性によって現実を徹底的に観察し疑視することにどっか」と腰を据えようとしたキーツが、その拠り所を全てシェイクスピアの文学に求めた見通し—歴史感覚はすでに尋常ではなかった。」

(塚野 141)

エンデイミオン (Endymion) が二十二歳の作とは思えば驚くべき成功であったけれども、言葉使いが乱暴であったり、押韻のため無用の文字を列ねたり、安価な感激があったり、知識体系が乏しかったり、欠点が多かった。しかしキーツは、これを知るに明敏であった。

(齋藤 xiv)

このようにキーツは、自分自身の欠点を承知していたためシェイクスピアからの知識や意識、韻律などを吸収し作品に取り入れたことが考えられる。また、A thing of beauty is a joy forever. (Endymion. Book 1 1.8) とキーツは知っているが、しかし現実には、移ろい滅びていくものである。また美を表現する

ことは、心の中の美であるといっていることから、心の中の美は、永遠であると解釈できるのではないだろうか。

ハーンは、詩の意味をパラフレーズして、“I thought to myself that such a wild flower was indeed much sweeter and more beautiful than our artificial flowers.”と講義しているが artificial flowers とは、人工のものであるか、栽培されたものであるか、把握できない。しかし、キーツは、garden-rose と記述していることから栽培されたバラとの比較と考えたい。第1連の1行からは、社会的現象のことを表現し、第2連では、野生の花を肯定し妖精の世界へと誘う。次の行は否定が入り友人にお礼の言葉を表現する。最後の行の13行目と14行目は、キーツが最も表現したい事柄がおりこまれ、観賞者と作者が一体化する。キーツの表現に魅了されるのは“Whisper’d of peace, and truth, and friendliness unquell’d.”である。

キーツは、雲雀の営み、騎士道たちの日常の営みを提示し、次にバラの花の命と人間の命のはかなさを、比喩を用いて考えさせる。そして、キーツ自身は wild flower の美しさを彼なりにいいと思っていると感じられるが、しかし、友人が送ってきたものはもっといいと思っていることも読み取れる。

ところでいけばなの花は、dead flowers といえるのであろうか。いえなくはない。なぜならば、一度花の生命線が断ち切られるからである。しかし、その断ち切られた生命を再生し、新しい生命を最大限にいかしきるのがいけばなである。断ち切られた生命を再生するには、時間との闘いがある。早く美しい姿を構築することによって花は、生き永らえる時間が延びるのである。しかし、そこには、花と対話する必要がある。また、花との葛藤がある。対話するとは、花を見ているはずの自分が花から見られているということになるということである。また、葛藤とは、命を断ち切られた花と自分との葛藤である。いかに断ち切られた命を最も美しい瞬間に秘めて咲く花に表現するには、さらに、そのような花をいかすためには、細心の配慮が必要になるのである。野生のままの状態の一本の枝を、矯めたりひねったりすることによって真っすぐな枝に強制したり、時にはその曲がったままの枝の線をいかしたり、さらに常に花と共に葉を添え、草木の生命の美の全体を表わさなければ

ならない。時には、この一本の枝が思うようにいかず悪戦苦闘する。このわずかな葛藤の時間、緊張の時間こそが花をいかす技である。いけばなは、いけた人の心を表すという。このいけられた花は、いけた人からいけられた花を見る人への愛でもある。花は、花でなく人になる。花をいけるとは、心をいけることである。連歌道『十問最秘抄』の中で二条良基は、次のように述べている。(井島 47)

「常の事を珍しくする⁸を上手とは申すなり、常の事の新しくなるを秘事といふ。」

いけばなの花は、一度断ち切られた生命を余命として考えるのではなく、人の心が一度断ち切られた花の中に、新たにいかされることであり、この甦りは、見た目には束の間であっても生命の繰り返しが見られることである。西欧の flower arrangement は花梗^{かこう}だけ、つまり胴体のない頭だけをオアシスという水を含んだスポンジに隙間なく中に埋めていき形創る芸術である。また、西欧の花束は、日本のいけばなのような思想はないし、空間の美を創ったりしない。いけばなは、花であるが花を越えたところに哲学があると考えられる。ハーンは、“In a Japanese Garden”⁹で「いけばな」について次のように述べている。

After having learned — merely by seeing, for the practical knowledge of the art requires years of study and experience, besides a natural, instinctive sense of beauty — something about the Japanese manner of arrange flowers, one can thereafter consider European ideas of floral decoration only as vulgarities. This observation is not the result of any hasty enthusiasm, but a conviction settled by long residence in the interior. I have come to understand the unspeakable loveliness of a solitary spray of blossoms arranged as only a Japanese expert knows how to arrange it, — not by simply poking the spray into a vase, but by perhaps one whole hour’s labor of trimming and posing and daintiest manipulation — and therefore I cannot think now of what we Occidentals call a “bouquet” as anything

but a vulgar murdering of flowers, an outrage upon the colour — sense, a brutality, an abomination. (Hearn 344-345)

日本のあのいけばなの技術、いけばなをいくらか学んでみると、一もつとも、一口に学んでみるといっても、花道なる知識をうるためには、美に対する先天的な直観力のほかに、長年の研究と経験を要するから、せいぜい、目で見て学ぶという程度にとどまるけれども、とにかく、あの日本のいけばなを学んだあとは、だれしも、西欧人のいけばなの飾り方に対する考えが実に野蛮な、不趣味きわまるものだということを、つくづく考えさせられる。この所見は、けっして一時の隋喜礼讃から生まれたものではない。日本に長く住んでみて、そのうえで初めてうちたてられた確信である。そういうわたくしなども、ようやくこの頃になって、日本にいけばなの師匠だけがその技術をこころえている。あのわずか一枝いけただけの花の枝の、なんともいえない美しさ、—それをいけるには、ただ花を花瓶にむざっとさしたりするのではなく、おそらく、一時間もためつすがめつ苦心して、あるいは枝をはさみ切り、あるいは恰好を矯め直し、いろいろ手先で優雅な細工を加えて、そうしていけあがった花の、あのなんともいえない美しさが、どうやらわかるようになってきたくらいである。ところで、それがさてわかってみると、我々西欧人のいわゆる bouquet (花束) などというものは、それこそ不風流な花の殺生、色彩観念に対する冒瀆、いや暴行であり、醜行であるとしたか、今のわたしには考えられないのである。(平井訳 5-6)

ハーンは、日本のいけばなと西欧のアレンジメントを比較して述べている。いけばなから魅せられる繊細な美といけばなから感じられる美の空間は、西欧のアレンジメントには見受けられないものとして映ったに違いない。しかし、一方では、西欧のアレンジメントは、日本の若い人々にとって exotic なものとして受け入れられている現実がある。

I think I have told you that he is not a great poet — in spite of being poet laureate: indeed he has written scarcely anything of real value. Nevertheless, you ought to know that one of the very few good things which he did write happens to be about a rose. He is addressing somebody as Wild Rose—a common name for an English girl, and he plays very prettily with fancy.

(講義録 132)

彼は、桂冠詩人だが大詩人ではないと、以前述べたことがあると思うが、確かに彼は、価値があるといえるものをほとんど書いていない。しかし、彼の数少ない佳作の中的一篇が、たまたまバラを歌ったものであることは、諸君も知っておいてよい。彼はある人を野バラと呼びかけている—これは、英国の少女のありふれた名前で、彼はたいへん美しい幻想とたわむれている。(329頁)

このように述べて、ハーンは、オースティンの詩を引用する

A Wild Rose

The first wild rose in wayside hedge
This year I wandering see;
I pluck, and send it as a pledge,
My own Wild Rose, to thee.

For when my gaze first met thy gaze,
We were knee-deep in June;
The nights were only dreamier days
And all the hours in tune.

I found thee, like the eglantine,
Sweet, simple, and apart:

And from that hour, thy smile hath been
The flower that scents my heart.

And ever since when tendrils grace
Young copse or weathered bole
With rosebuds, straight I see thy face,
And gaze into thy soul.

A natural bud of love thou art,
Where, gazing down, I view,
Deep hidden in thy fragrant heart,
A drop of heavenly dew.

Go, wild rose, to my Wild Rose, dear;
Bid her come swift and soon.
O would that she were always here!
It then were always June.

ふらりと出かけた、道ばたの垣根に
今年最初の 野バラをみつけ、
これを摘んで、愛の証しに 君に
贈ろうか、わが野バラの君よ。

ぼくの瞳と君の瞳が 初めて出会った、
あの時ぼくらは 六月の草に埋もれ、
夜は、夢見心地の昼の続きにすぎないし
四六時中 調子があっていたものね。
ぼくの見つけた君はねえ 野茨のように
優しくて素朴で ぼつねんとしていた、

そしてあれから 君の笑顔は
ぼくの心に香る 花であったのだ。

だからあれから 風雨をうけた幹や若木が
蕾の付いたバラの蔓で 美しく
飾られていると たちまち君の顔を思い
君の心のうちを のぞきこむぼくなのだ。

君こそは 愛の自然な蕾なのだ、
身をこごめて見つめるぼくは 君の
ふくよかな心の 奥深いところに
天上の露の ひとしずくを見る。

さあ野バラよ、わが野バラの君の所に行き
今すぐに急いでおいでと 行ってくれ、
おお あの女^{ひと}がいつもここにいてくれたら！
そこでいつも 六月であればね。(329-330 頁)

詩に使われる赤いバラは、愛の告白として表現されている。赤は、血のような赤さ、バラの美しさ、やさしさ、純粹さを表わす愛の表現につかわれた。ここでの花は、赤い野生のバラである。春の赤いバラは、乙女の誇りとする美がある。しかもその時期の最初に咲く花が大事とされ、野バラは、新鮮で清らかでなければならない。その新鮮さの別の表現として、青々と茂った旺盛な草を knee-deep と表現している。

人間に対して悪戯っ子という時は、naughty boy や naughty girl であろう。しかし、ハーンは、この詩の中の wild rose を wild boy や wild girl と位置付け、wild と称し、乙女の純真さ・無垢に対して、自然に属するもの、自然の美しさなるものとして講義している。

なぜ、これほどまでに花は人の心を惹きつけるのか。ただ美しいばかりでは説明がつかない。花は美を体現したものであると同時に、性を象徴したものであるからである。文学における花の役割は、個々の作家の個人的テーマでありながら、それを超えて、花はある意味ではきわめて文学的に忠実にその時代を反映したものであるまいか。 (中山 2-3)

花は、時代を反映するという点について共感はある。時代によって使われる花が違うからである。しかし、バラの地位は、いかなる時代においても首位を占めている。一方、花は、喜びにつけ悲しみにつけ、我々人間の不断の友であると思われる。花とともに結婚式を挙げ、花とともに黙想に耽る。花は、心の疲れをいやしてくれる。花は、病床の友をいたわり、花は、我々が土に戻る時、友として傍にいてくれる。このように物を言わない花は、はかり知れないものを人間に与えていることを思わずにはいられない。

おわりに

ハーンの講義の中で、特に natural と artificial の言葉が使用されていた。西欧文化では、キリスト教の出現から、自然は人間の下にあり常に征服されるものであるという思潮の世界観であった。人間が手を加えて改造した自然は、19世紀において、ありのままの自然を発見し人間の手が加えられない自然が謳歌されるようになっていった。今まで、自然の示す荒々しさ、恐怖は、人々に忌む嫌われていたが、それが美の対象として考えられていった。そういった中、ロマン主義者たちは、「自然」「想像力」「洞察力」「知覚力」に力を入れるようになっていった。ハーンは、そのようなロマン主義思想とスペンサー (Herbert Spencer) の進化論の思想を持っており、講義のなかに織り込まれた。冒頭で述べた natural と artificial であった。ハーンは、natural を自然、自然の物として草木から小動物に至るまで、その素晴らしさについて折に触れ講義をし、また、その対極をなす artificial についても対比しながら

ら講義をした。花の英詩については、作品の中に作品が呼び起こす感情に着目し重視した。講義の始まる前には必ず詩の特徴を述べ、ハーンが詩の良し悪しをハーンの範疇で判断し、講義に臨んだ。ハーンの唱える感情とは、事物を見るときは、最初に目にとまる。そして、視覚で判断するが、それは束の間の受動的なものであると述べている。事物には、こころというものが内在しており、その事物が生じる感情というものが表明されることが大事であると述べている。ハーンは、感情が人間の文化的遺産の一環であると考え、人間の歴史であり、文化の歴史でもあると述べている。さらに、ハーンは、講義の中で詩の中に表現されている感情的な面や知的想像力に対して、仏教や哲学と対比させながら好奇心に刺激を与えたり、詩の内容を日本語に置き換えて自ら文学を創る事に挑戦させたり、日本文学を創るためには一つの言語だけで満足することに偏るということを避けさせた。しかし、ハーンの意味が日本の学生達にどれほど理解されたか英詩の講義の中からはくみ取ることが出来なかったが、常にハーンの講義は、学生たちに人気を博したということは、ハーンの愛の言葉、魂の力が学生達に届いていたということをおうかがい知るものであろう。

註

- 1 ラフカディオ・ハーン著作集 第6巻489頁、第7巻496-504頁引用。
- 2 金子健二 1880年生(明治13年)
長野県飯田中学校に1年半を終えてから、古代・中世の英語、英文学研究の目的をもって渡米、3年後の1909年帰国。東京大学講師、文部省督学官、広島高師教授、静岡高校・姫路高校の校長をへて1949(昭和24)年昭和女子大学の初代学長。
著書：『英語史発達』(1927)、本邦初訳『カンタベリ物語』(1917)、『北欧の海賊と英国文明』(1927)、『英国自然文学の研究』(1928)、『人間漱石』(1964, 1956). 5.Oct.2011. <http://tom.edise.jp/hiroshima/kaneko_kennji.htm>
金子健二のこの講義録は、『記録 東京帝大一学生の聴講ノート』という

タイトルで、彼の孫である金子三郎氏が編集され、昭和女子大学の図書館に現存する。本書からの引用は便宜上『講義録』と略称することとする。なお訳は『ラフカディオ・ハーン著作集 第13巻』鳥海久義訳を引用。

- 3 『人はなぜ花を愛でるのか』141頁
「冠位十二階」の装飾の制度（中国側の史料、『隋書』）
其の装飾、男子は裙襦を衣る。其の袖は微小、履は履形の如く、その上に漆をかけ、之を脚に繋ぐ。人庶は多く跣足にして、金銀を用いて飾りと為すを得ず。故時は、横幅に衣る。結束して相い連ねて縫うこと無し。頭には亦た冠無し。但し垂髪を兩耳上にす。隨に至りて、其の王、始めて冠を制す。錦綵を以て之を為り、金銀鏤花を以て飾りと為す。婦人は後に結束し、亦た裙襦を衣る。裳には皆な襍籤あり。
- 4 ばら戦争 (War of the Roses 1455-1485) 『ラフカディオ・ハーン著作集 13巻』139頁
- 5 musk-rose: (別名 ジャこうバラ *Rosa moschata*) は花言葉を ‘capricious beauty’ (気まぐれな美) といって香りが極めてよい。musk-rose は、white rose of English (*rose alba*) の先祖だという説がある。また、晩夏に咲く花である。『英文学植物考』231頁
- 6 *Letters*, I, 135, where Haydon is clearly repeating previous advice.
- 7 エドマンド・キーン (Edmund Kean. 1787-1833) は、イングランドの俳優、18世紀から19世紀当時最高の俳優と讃えられていた。5. Jan. 2012. <<http://ja.wikipedia.org/wiki/>>
- 8 珍しい・珍しくするとは：季節外れの花をいうのではない。例えば、春には桜が秋には紅葉が、絶対的な意味で真に心に珍しいもの。それが不動の美しさであり豊かな美しさをいう。
- 9 Lafcadio Hearn. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Vol. II. 344-345頁

Works Cited

- 安部 薫『シェイクスピアの花』東京、八坂書房、1997年。
- 井島勉編『いけばな体系 第一巻・いけばなの美学』東京、角川書店、1971年。
- 岡倉天心、桶谷秀昭訳『茶の本』東京、講談社、1994年。
- 金子健二、金子三郎編『記録 東京帝大一学生の聴講ノート』東京、リーブ
企画株式会社、2002年。
- キース、トマス『人間と自然界—近代イギリスにおける自然観の変遷』
山内昶監訳、法政大学出版局。Thomas Keith, MAN AND THE
NATURAL WORLD : *Changing Attitudes in England 1500-1800*. New York
: Oxford University Press, 1996.
- 金城盛紀『花のイギリス文学』東京、研究社、1997年。
- 小泉八雲、平井呈一訳『小泉八雲作品集 第六巻 日本瞥見記(下)』東京、
恒文社、1964年。
- 弥野利久『比較文化入門』東京、北星堂書店、1995年。
- 斎藤正二『日本の自然観の研究』全2巻、東京、八坂書房、1978年。
- 塚野 耕『The Idiosyncrasy of language in Keats』広島、文化評論出版、1980年。
- 中村隆弘『花と人』大阪、開隆館出版、1988年。
- 中島進、辻惟夫編『花の変奏』東京、株式会社ペリかん社、1997年。
- 中島文雄『英語教育と英文学』東京、大修館、1976年。
- 西山松之助『花と日本文化』東京、吉川弘文館、1985年。
- 奏 恒平『花と風 奏恒平評論集』東京、筑摩書房、1972年。
- 春山行夫『花の文化史』東京、(株)雪華社、1961年。
- ハーン、ラフカディオ、池田雅之ほか訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第
6巻』東京、恒文社、1980年。
- ハーン、ラフカディオ、池田雅之ほか訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第
7巻』東京、恒文社、1985年。
- ハーン、ラフカディオ、野中涼、野中恵子訳『ラフカディオ・ハーン著作集
第12巻』東京、恒文社、1982年。

- ハーン、ラフカディオ、佐藤喬ほか訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第13巻』東京、1989年。
- ハーン、ラフカディオ、斎藤正二ほか訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第15巻』東京、恒文社、1985年。
- 日高敏隆ほか『人はなぜ花を愛でるのか』東京、モリモト印刷、2007年。
- ヒューズ、ジョージ、平石貴樹・玉井彰訳『ハーンの轍の中で』東京、研究社、2002年。
- ミルワード、ピーター、安西徹雄訳、『シェイクスピアの人生観』東京、新潮社、1985年。
- 山下重一「ラフカディオ・ハーンとハーバート・スペンサー」『英学史研究』（第30号）日本英学史学会、1997年、pp.27-45
- 山内久明ほか『ヨーロッパ・ロマン主義を詠み直す』東京、岩波書店、1997年。
- Akagawa Yutaka. *A Brief History of the English Garden*. Kenkyuushya. 1997.
- Bowra, C.M. *The Romantic Imagination*. Oxford University Press. 1950.
- Gittings, Robert. *JOHN KEATS*. Pelican books. 1971.
- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan. Vol. II*. Houghton, Mifflin and Company. 1894.
- Hough, Graham. *The Romantic Poets*. Hutchinson & Co. 1953.
- Keats, John. Saito Takeshi, Fukuhara Rintaro. eds. *Select Poems of John Keats*. Kenkyusha. 1923.